

## 令和5年度 学内研究助成金 研究報告書

研究種目	<input type="checkbox"/> 奨励研究助成金	<input type="checkbox"/> 研究成果刊行助成金
	<input type="checkbox"/> 21世紀研究開発奨励金 (共同研究助成金)	<input type="checkbox"/> 国際共同研究推進助成金
	<input checked="" type="checkbox"/> 一般研究助成金	<input type="checkbox"/>
研究課題名	生ゴミの資源化活動に関する実践的研究	
研究者所属・氏名	研究代表者：経営学部経営学科 上西聡子 共同研究者：	

### 1. 研究目的・内容

本研究では、生ゴミの資源化活動（特に、コンポストを利用した生ゴミの堆肥化）に注目し、いかに多面的価値が組織化されていくのかを捉えることを目的とした。SDGs や脱炭素社会といった環境保全を表象するキーワードが続々と誕生し、様々な分野で環境保全活動が活発化している。同時に、環境保全を通じることではじめて可能となった異業種間の取り組みや個人の活動が増加している。ただし、異業種が関わる取り組みでは、それぞれの産業で築かれてきた価値が集合することで、価値の違いによる対立や闘争が生じやすく、その解決策や対策は多種多様にあるものの、十分な検討はされていない。また、個人の活動でも、環境保全に対する価値が多元化・多様化しているが、それがどのように形成されたり、企業の価値と結びつくかについての検討は始まったばかりである。そこで本研究では、生ゴミの資源化活動に注目し、①環境保全活動に対する価値付け（環境保全の論理の探求）、②価値の違いによる対立や闘争を乗り越えて形成される多面的価値の組織化（価値付けの実践の検討）、の2点を研究課題として取り組んでいく。

### 2. 研究経過及び成果

本研究の第一段階として、まずは目的の②に述べた価値づけの実践を検討するため、対象となる「生ゴミの資源化活動」の醸成に注力した。研究対象としたのは、本学経営学部の学生である。果たして学生がどのように多面的価値に関わり、組織化に参画していくのかということ、生ゴミの資源化活動プロジェクトを通じて、その変遷を捉えようとした。

そのために注目したのが「トランジション・アクション」という概念である（森等, 2022）。トランジション・アクションとは、様々に変化する社会環境に対するアクションのことであり、近年では持続可能な社会への変革や転換は「サステナビリティ・トランジション（sustainability transition）」と呼ばれ、近年その重要性が指摘されている（森等, 2022）。特に、松浦（2022）や森・田崎（2022）の研究では、トランジションの仕組みそれ自体よりも、トランジションに対応する（もしくはトランジションを生み出す）人材に焦点を当てる。例えば、森・佐藤（2022）は、トランジション・アクションに必要な人材の育成について検討している。トランジションには取り組みを立ち上げる「フロントランナー」が注目されがちであるが、フロントランナーだけでなく、賛同し参加する「アーリー・アダプター」もしくは「フォロワー」といった、それぞれの役割を持った人材が関わる（森・佐藤, 2022, p. 68）。こうしたトランジション・アクションに関わる人材の育成は、多くの場合、学校授業や環境イベントに参加することがアクションのきっかけとなってスタートし、議論・活動できる仲間を得たことが継続的なアクションの実践につながっていたとされる（森, 2022, pp. 154-156）。つまり、トランジション・アクションに積極的な人を創出するためには、特別な条件や資質が必要なわけではなく、

既存の教育を活用し、きっかけと場をうまく提供することができさえすれば、より多くの人がトランジション・アクションを実践できるようになる。こうした人材を育成し、トランジション・アクションを推進するマネジメントは、トランジション・マネジメントとも呼ばれ、こちらも近年注目されている（松浦, 2023）。

そこで具体的に、生ゴミを堆肥化するコンポストバックを使い、学生自身が堆肥を作りながら、約10カ月にわたって活動した（2023年5月～2024年3月）。こうした活動の中で、学生は子ども食堂と連携したり、多様なボランティア活動や地域イベントに参加したり、農家と一緒に農作業をしたり、市民に向けたコンポスト講座を実施するなど、コンポストを中心に広がる多種多様な関係を構築することとなった。こうしたトランジション・アクションに関する調査は、主にアンケートもしくはインタビューの形が取られている（森等, 2022）。そのため、本研究でも、現在、学生たちに対する半構造化インタビューを行うための準備を進めている。インタビュー項目は、森等（2022）を参考にする。

こうしたトランジション・アクションに関して、本研究が理論的基盤を置く価値評価研究（valuation studies）でも取り上げられ始めている。価値評価研究は、多様な分野の研究者が集まって評価の問題に関する研究と議論のための学術プラットフォームの提供を目指す。それは決して経済合理性を追求するための唯一の評価の効率性を高めるという評価の議論ではなく、我々が現実に行う価値づけの行為について検討するものである。価値評価研究の理論的起源の1つとされる Dewey (1939) の“Theory of Valuation”では、価値の意味を明らかにするには「尊ぶ（prizing）」と「値踏みする（appraising）」という二重の意味を含む、「実際に役立つ価値（worth）を付与する」動詞としての価値を検討する必要があると指摘される。つまり、経済合理性に担保される唯一の価値を決め打ちするのではなく、経済合理性を含んだ多元的な価値がどのように作られていくのか、それを価値評価研究では評価（valuing）もしくは価値増大（valorizing）の過程として捉えようとしているわけである。

ただし、価値評価研究では、多くの研究がSDGsに関する制度ロジックが企業や自治体に与える影響等の分析に限定されている。では、次世代の担い手となる学生や若手の企業家は、どのようにSDGsに関する価値に対応し、どのようなトランジション・アクションを取り、どのようにサステナブルなエコシステムを形成しようとしているのだろうか。本研究では、上述したように、生ゴミの資源活動というトランジション・アクションを通じて、学生たちの評価もしくは価値増大がどのように行われたのかを、今後行うインタビュー調査を経て明らかにする。結果については、今後、分析し、学術論文として発表する予定である。

### 3. 本研究と関連した今後の研究計画

2.に述べたリサーチアジェンダにもとづき、今後は価値評価研究のなかでも、とくに制度ロジック概念を取り入れた分析枠組みを構築し、SDGsに関する価値に対応する学生や若手企業家によるプロジェクトを対象とした調査を実施していく予定である。

周知の通り、組織研究では利害関係者によって形成される関係自体を環境と捉え、その形成や変遷のメカニズムや意義が検討されてきた。製造業に携わる企業も、近年は農業や漁業など自然環境と関係する事業を展開するなど、サステナビリティ・トランジションを実施し始めている。それに伴い、日本的経営やトヨタ生産方式など日本特有のマネジメントが農業や漁業にも導入され、経営実践が多様化すると同時にその意義やメカニズムの探求が求められている。学生プロジェクトを実施しつつも、企業が環境保全に取り組む意義や保有する価値と結びつける過程や仕組みなど、環境保全活動と経済活動を両立させる企業に対する理解を深めていくことで、研究と教育の橋渡しも狙っていきたい。

### 4. 成果の発表等

発表機関名	種類（著書・雑誌・口頭）	発表年月日（予定を含む）